

「与作」の思い出



和知正隆

「与作は、木を切る…」、『存知、北島三郎の演歌の一節であるが、その題名「与作」は、本校の生徒の間では別の意味で使われている。

本校では、文部省の指定を受けて、「勤労体験学習」（以下「勤体」と呼ぶ）の研究・実践をしてきた。

その概要是、校有地である約二千五百坪にも及ぶ山林を学校園として造成し、そこに、学年ごとに作物の栽培を行い、これらの作業活動を通して、生徒に、創造心、協力心、責任感、規律心、環境美化の心、奉仕の精神、そして勤労の喜びとその意義などを体得させようといふものである。

いわゆる「なすことによつて学ぶ」ということの一つの試みである。

作業は、最初のヤマ場である雑木林

の伐採と抜根から開始された。普通科の生徒たちにとって、人跡未踏の雑木林の中の作業は、周到な準備と事前指導を必要としたが、いざ始まつてみると、生徒たちは意外にも意欲と興味をもつてこれにあたり、短時日のうちにこれをきり拓いてしまつた。

この伐採作業の過程で、生徒たちは誰からともなく、「与作」を口づさみ始め、困難な作業を自分たちのベースで、むしろ楽しいものにしてしまつた。感があった。以後、「与作」は「勤労体験学習」の愛称として定着し、その後の活動の展開に大いに寄与したといえる。正に言い得て妙であり、フィーリングエイジの子供たちである。

この「与作」の時には、教職員も教科書とチョークをノコギリやクワに持



ペイヘイホー ヘイヘイホー

ちかえ、ギックリ腰を気にしながら、額に汗して、木の根っ子に挑んだものである。

かくして二年目に入り、収穫の秋を迎えた。広大な学校園には、色とりどりの草花が咲きほこり、一部には冷夏のためかサヤだけの大豆もあつたが、トウモロコシは全校生で試食し、それすぎたカボチャは職員会議の議題にもなつた。そして、フィナーレは、サツマイモの芋煮会だった。地面にかまどを掘り、煙で涙を流しながら雑木をくべ、教職員と生徒とがひとつになつて大いに楽しい時をすごしたのだつた。

このように実践してきた本校の「勤体」ではあるが、まだ、その緒についたばかりである。したがつて、今

ちかえ、ギックリ腰を気にしながら、額に汗して、木の根っ子に挑んだものである。

かくして二年目に入り、収穫の秋を迎えた。広大な学校園には、色とりどりの草花が咲きほこり、一部には冷夏のためかサヤだけの大豆もあつたが、トウモロコシは全校生で試食し、それすぎたカボチャは職員会議の議題にもなつた。そして、フィナーレは、サツマイモの芋煮会だった。地面にかまどを掘り、煙で涙を流しながら雑木をくべ、教職員と生徒とがひとつになつて大いに楽しい時をすごしたのだつた。

このように実践してきた本校の「勤体」ではあるが、まだ、その緒についたばかりである。したがつて、今

ちかえ、ギックリ腰を気にしながら、額に汗して、木の根っ子に挑んだものである。

かくして二年目に入り、収穫の秋を迎えた。広大な学校園には、色とりどりの草花が咲きほこり、一部には冷夏のためかサヤだけの大豆もあつたが、トウモロコシは全校生で試食し、それすぎたカボチャは職員会議の議題にもなつた。そして、フィナーレは、サツマイモの芋煮会だった。地面にかまどを掘り、煙で涙を流しながら雑木をくべ、教職員と生徒とがひとつになつて大いに楽しい時をすごしたのだつた。

このように実践してきた本校の「勤体」ではあるが、まだ、その緒についたばかりである。したがつて、今

（福島県立白河女子高等学校教諭）